

すなっぴ

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ

福島に生きる

答えのない問いに向き合って

福島県の高校生の声を聴く



南相馬市小高区海岸付近の水田地帯の現状

「春休み中に福島の高校生の様子を取材しに行きませんか？」ひとりの運営委員のこの一言で即決。福島県立高教組の協力を得てフォーラム初の県外取材が実現しました。3月28日、29日の日程で運営委員と会員9人（針谷順子さんは浪江町生まれ）が参加しました。

南相馬市の小高区では、荒れ果てた田畑に津波で流された数多くの乗用車や耕作機械が泥をかぶったままになっています。引き渡し寸前の新築の家もありました。無人と化した町並みはまるで時計が止まったように見えます。震災や原発について語る高校生の目には大きな涙の粒がありました。いつもよりもページ増となった「すなっぴ」をじっくり読んで下さい。

福島県立高教組を訪問しました

福島取材、最初の訪問地は福島市。阿武隈川のほとりに立つ福島県教育会館の一室で福島県立高教組書記次長斉藤毅さんの話を聞きました。

「3・11、高校は二期選抜判定会議の日。判定会議が終わって福島東高校の職員室に戻った時に地震がきました。横、前後にかき回されるように揺れ、ロッカーさえ動いて職員室はごちゃごちゃになってしまいました」と、当時の混乱ぶりを思い出しながら語り始めました。

教師たちの取り組み

県立安積黎明高校の慶徳芳夫先生はA高校の生徒3年生133人を対象にアンケート調査を行

ったそうです。その結果を紹介してくれました。
68%が「不安あり」

普段、放射線の話をしている生徒の姿を見たことがないけれど、「放射線に関する不安がありますか」の問いに、76%が「ある」「少しある」と答えた。その76%に対して「どのような不安ですか」と質問したところ、男子の68.8%が「将来、ガンや白血病になるのではないかと答え、女子の62.3%が「将来、子どもを持つことができるか（子どもに健康上の影響が出るのではないかと答えている。しかしもっとも大きい不安は「いわれのない差別を受けるのではないかと」というものだった。（73.3%）自由記述には「県外に旅行した際に『どこから来たの』と聞かれ

て『福島』と答えただけで避けられ、心ない言葉を掛けられたことがある」という声もあった。彼らは深い部分で傷つき、苦しんでいます。

原発問題への視線

そんな生徒たちに「国内の原発を、当面どうしたらよいと思うか」「国内の原発を将来的にどうしたらよいと思うか」と質問した。「当面」に対しての回答は「電力供給能力が不足する電力会社にかぎり、安全性が確認できたものを必要な分だけ稼働する」など条件付きを含めて**85%**が再稼働を容認するという結果だった。また「将来的」に対しては「原発依存度を高める」「維持する」が合計**16.5%**、「依存度を下げる」

が**36%**、「**原発ゼロを目指す**」は**43%**だった。さまざまな不安を抱える原因を作り出した原発に対し、もっと多くの生徒がNOと答えるものと思っていたが、結果は意外なものだった。

高校生平和ゼミ発足

斉藤書記次長は、高校生自身に、原発事故後の様々な課題について学んでほしいと考え、県内の高校生に呼びかけ、今年1月に福島県高校生平和ゼミナールを結成しました。月に一回程度例会を開き、原発事故の被害調査などの活動に取り組むそうです。高校生に自主的に行動する力を育ててほしいと語りました。

川俣高等学校を訪問して(3月28日)

3月28日の午後、福島県立川俣高校を訪ね、二人の先生からお話を聞きました。川俣高校は福島市の隣、川俣町にある普通科2クラスと機械科1クラスずつのこじんまりした高校。二年たってやっと全ての敷地内の除染が終ったということでしたが、耐震補強工事の最中でした。

先生たちも被災者

松本佳充先生(数学)は、震災発生時は浪江町に家族6人で居住し(原発から7.5km)県立双葉高等学校(原発から3.5km)に勤務していました。3月11日の14時46分、ちょうどテニスコート(原発から2.8km)で部活動中に大地震発生。生徒とともに避難しました。自宅に帰ってみると家はメチャメチャ、停電・断水・通信不能。寒い中、車中泊。原発で何が起きているのか、その日は全く知らないまま、翌12日、浪江町が避難命令を出したので、何も持たずに車1台で避難しました。誰もが2・3日で帰れると思っていたと言います。避難先を転々として「今は母(87歳)と妻の3人で二本松の妻の実家にお世話になっています。家族全員が住める家もない。浪江町の家には戻りたくても戻れない。先の見えない大きな不安を抱えたまま、現在まで何も解決していない。」と語ってくれました。同じように、多数の生徒・職員の自宅も津波と原発被害に遭いました。

私の幸せは一瞬にして奪われた・・・

原発に翻弄される被災生徒達

生徒は普段明るくふるまっていますが、心の傷は深いと、松本先生は生徒の文章を紹介して下さいました。



松本先生(左)と鈴木先生

「原発事故により、この日から避難生活が始まった。最初のころは本当に辛く苦しくて毎日が嫌だった。通える学校があり、帰れる家がある。それまで当りに過ぎていた生活がどれだけ幸せだったのか、思い知らされた。自分だけ辛いわけではない、みんな辛いんだとわかっていった。」「3月11日に起きた東日本大震災そして原発事故。私の幸せは一瞬にして奪われた。家に帰れない。家族に会えない。お風呂に入れない。食べ物もままならない。そんな生活が一週間続いた。ようやく家族に会えたのは、震災から6日後の3月17日だった。会った瞬間、涙が止まらなかった。」「そして事故から7ヶ月が過ぎた時、車での一時帰宅があった。私はこの時やっと、自分の気持ちに諦めがついた。『もう故郷の

家には住めない。帰れない』と。だから、これからは前向きに笑顔で頑張ろうと決めた。しかし、それは無理だった。友達と遊んでいても、学校にいても、どこか辛くて、授業で先生が原発・放射能という言葉を目にするだけで涙があふれそうになることもあった。」

原発30km圏内には高校が8校ありましたが、約55パーセントの生徒がサテライト校へ、他は県内外の高校へ転校しました。サテライト校は、協力校の特別教室や同窓会館、体育館を借りて仕切り、教室として利用していますが、不便な勉学を強いられ、部活動や諸行事もままなりません。先生達もサテライト授業の掛け持ちで長距離通勤が多くお疲れです。

一番の被害は

「人のつながりが分断されること」

鈴木裕子先生（家庭科）は言います。「今、復興だということで、原発や放射能のことを言えない雰囲気があります。震災で多くの家族が別れ別れになりましたが、放射能のことで、職場でも意見が分かれています。それまでは子どもたちのためにと行って同じ方向を向いてやってきた人でも、一人は放射線の被害が心配、一人は気にする方が心配と言って分かち合えず。家族や夫婦の間でも意見が違い、離婚が増えています。生産者と消費者も分断されちゃって…ほんとはお互い被害者なんだからと思うのですが。震災で人のつながりが分断されることが一番大きな被害です。」

高校生は、アンケートをとると「原発は無くなってほしい」と書いているのですが、「放射能や原発について知りたいことがありますか」と聞くと「ない」「ない」「ない」。どうしてと突っ込んでみると「不安になるからこれ以上知りたくない」と。「やっぱり心配なのですね。日常しゃべるといことはないのでしょうが、結婚できるかどうかとか、子どもちゃんと産めるかどうかと心配してますし、食べ物大丈夫なのかなあと言っています。」

未来へのパズル～

一人ひとりが大切なpeace～

震災後初の文化祭「かえで祭」

私達の訪問の目的の一つは、川俣高校が文化祭で今回の大震災を取り上げたと聞いたからです。文化祭の話題になると、鈴木先生の顔が明るくなり臨場感のある語りに惹き込まれました。部屋の壁に貼ってあるポスターは地球をまんなかに明るいトーンのデザイン、テーマのpeaceには平和、一人ひとり（piece）という意味もこめられています。3年に一度の開催ですから、大震災後初めてということで、大震災を



乗り越えた生徒達の未来への想いを感じました。

「かえで祭」は昨年10月27日（土）～28日（日）。生徒達は、震災当時のことを、川俣町の災害対策本部や消防団にインタビューに行ったり、山木屋（町名）地区の仮設住宅に住んでいる人達に聞きに行ったりして、開催式でプレゼンテーションしました。体育館にはポスターの絵を折鶴で貼って大きな壁画にしました。必要な8万羽の鶴は生徒だけでは折りきれないので、仮設のおばあちゃんや町長さんや町役場の人、商店街の人、ありとあらゆる地域の人をお願いして折ってもらいました。家庭クラブでは、仮設の人達はいろんなことをやってもらっているけれど、逆におばあちゃん達に教えてもらう方がいいということで、折り紙細工のくす玉を教

えてもらいました。60枚の折り紙を使って手の込んだ珍しいくす玉です。それを食堂などに飾って評判になりました。「そしたら仮設でも話題になっておばあちゃん達が折り紙を一生懸命やるようになって、楽しいねと元気になり、折り紙を折る会ができちゃって、とうとうテレビのニュースに出ましたよ。」

「飯館の牛丼」再現物語…

文化祭で「ふるさとの料理」をつくる

鈴木先生は、家庭クラブとボランティア同好会の生徒たちが「クレープ屋さんやりたい」と言うので、「震災後なんだから、そんなのきなこと言ってないで」と考えさせました。そして「地域のお料理」ということになり、全校生徒に地元のおいしいものアンケートをとった結果、次の4つになりました。川俣シャモ、なみえやきそば、飯館牛の牛丼、山木屋のメロンパン。生徒はそれぞれ夏休み中に、関係の所に出かけて調査し教えてもらいました。それぞれにおもしろいエピソードと地域の人との関係が生まれました。その一端を。

飯館牛が手に入るはずもなく悩んでいた牛丼班、インターネットで飯館牛を連れて千葉に移転した牧場主のこと、その牛肉をネット販売している会社があることを知り、思い切って手紙を書きました。

『飯館村の地産地消の学校給食』、中でも人気のあった『飯館の牛の牛丼』を再現したい。自分達で食べるだけでなく、3年に1度の文化祭で来場者の方に味わっていただくことで、「ふるさとの味」を伝えていきたい。しかし震災の影響で『飯館の牛』はどこを捜しても入手できない状況・・・そんな中、『飯館の牛』を守るために千葉に移転してまで飼育をつづけている『小林牧場』小林さんのことを知り、小林さんを応援する会社の『牛一頭買いプロジェクト』に最後の望みをかけて手紙を書きました。『飯館の牛の牛丼』の具材に『小林牧場』の『飯館の牛』をぜひわけてほしいです。」

高校生の熱意が小林さんや会社の社長さんに通じたのはもちろんです。「欲しいんですか、買ってくれるんですか」「欲しいんです」というやり取りの後、10キロほどいただきました。お

米や野菜は支援で全国からもらった材料で、飯館の学校給食の栄養士さん達も朝早くから応援に来てくれて作りました。避難している飯館村の人、仮設住宅の人や町の人が食べに来て「なつかしい」「おいしい」と好評。小林さんも来てくれて生徒達の取り組みに対して涙を流して喜んで下さいました。

「文化祭を通して、生徒達はすごい達成感を持ちました。また“助けて”と助けを求めると必ず助けてくれる、応援してくれる人もいるということがわかったと言っています。」



答えのない問いを考えていく授業を

最後に鈴木先生が決意を語りました。「私はこれまで答えのある授業しかしてこなかった、答えがないことに対して答えを見つけていく学習をしてこなかったと反省しています。疑問を持って、考えさせる。意見の違う人とも話し合っ

て一致点を見出していく、そういう授業のやり方に変えていきたいと思っています。」…これは日本の学校教育の共通の課題ではないでしょうか。

(瀧口典子)

飯館村の今

川俣高校での取材を終えた私たちは、斉藤毅さんの案内で飯館村に向かいました。県道 12号線を北東に走ると間もなく峠にさしかかります。周囲の山肌は褐色の雑木に覆われ、少しだけ芽吹き of 気配が感じられます。「自然豊かな」と表現される東北の山地を走っているわけですが、違和感は否めません。群馬ではやがて田の畔はタンポポやレンゲで華やぎ、セリを摘む人の姿も見られる時期ですが、飯館では田んぼが葦原になっています。春の準備をする人の姿はありません。沿道の人家も人が暮す気配がありません。車を走らせながら、ずっと昔から耕してきた田んぼを、生まれ育った故郷を捨てて避難していった村人の気持ちを想像していました。

私たちは山沿いの相馬農業高校飯館分校跡地を訪れました。もちろん、迎える人はありません。無人の敷地内に放射線量測定器が設置され、

3. 8 μSv を表示していました。テニスコートもフェンスも枯れた雑草で覆われています。2年前には高校生の歓声に満ちていただろうに。今は桜のつぼみが開花を待つのみ。北向き斜面の裾にある校舎はあつと言う間に陽が陰り、気温もが下がってきました。(倉林順一)



生徒のいない学校で常設線量計だけが動いている

相馬東高等学校の生徒たちと懇談会（3月29日）

相馬東高校は相馬市にある男女共学の総合学科の高校です。私達は高校のホームページで『東日本大震災記録集』が出版されたということを知り、取材をお願いしました。元々この地域は干拓の埋立地で、地盤が沈下し、国道バイパスによって津波の浸水は食い止められたものの、校舎周辺が大きく破損しました。3月11日は入試のため生徒は休業日、部活動をしていた生徒のうち、保護者と連絡がつかず学校に泊まった生徒もいました。

私たちが訪れた日は離任式のあわただしい中でしたが、生徒会の役員を中心に17名の生徒（1年生9名、2年生8名）と先生方が丁寧に資料を準備して迎えて下さいました。教頭先生は挨拶の中で、生徒の中には親や祖父母、兄弟、親戚を亡くした者もあり、原発から50キロの地域によく生徒は残ってくれて気丈に頑張っていると、語って下さいました。生徒会長の大西悠斗さんは「私達の話から何か得られることがあれば嬉しいです。」と挨拶しました。

生徒との懇談会は2班に分かれ、小松庄一先生と佐々木晶子先生の進行で行われました。

「3. 11」その時、私は… 大震災時の様子

◆自宅が海から2キロ。母に会えた時は嬉しかった。いとこの家にいたが、原発事故のため栃木の親戚宅に避難。地元で、自分の志望した高校に入りたかったので相馬に帰ってきた。中学校の制服で入学式。

◆中学の卒業式の後、家に帰った。父と一緒に

に逃げた。父が妹を捜しに小学校に行き、全員が無事だった。原発事故で飯館村に避難。それから福島に。その後仙台に。八畳の部屋に6人で入学式まで住む。1年間は宮城県の高校に。「県外の子とは口をきかないように言われたから」と言われたこともあった。去年4月に相馬東校に転校できた。

◆中学校の卒業式の後、家に居たら地震が来て母と妹と犬と一緒に車に乗って近くの小学

校に行ったけどそこがいっぱい、近くの高台に逃げた。少ししたら大津波が来て私はそれを見た。津波に流されちゃった人が、自力ではい上がってきたのを見た。私の家は堤防のすぐ近くだったので家が流された。今年 2 月にやっと家が出来るまでは、仮設住宅に住んでいた。

◆私の家は海側にあるので、ラジオで津波が来るというので、ここまでは絶対来てしまうと、家族 8 人で何かしら持てる物を車に積んで逃げた。逃げる途中で黒い波のようなものが見えて、ギリギリで逃げることができた。大きな道はすごく混雑していた。家は大規模半壊。しばらく山手の親戚の家にお世話になり、そこもガスや水道も安全ではなく、水汲みに行ったりという生活が続いた。

◆家に一人でいたが、地震が来てこわいので窓を開けていたら、近所のおばさん達が声かけてくれたので楽になった。食料とか、みんな売り切れで、近所の人達で分け合ったりしながらなんとか過ごした。まわりの人達に感謝している。

◆家は床屋なので、中の物が倒れたりスチームの機械が壊れて家中水浸しで、鉄で壁が壊れたりした。それから原発の第一回の爆発で避難。川俣の小学校に避難したがいっぱいだったので外で車内泊。食べる物もなくて過ごしたが、二回目の爆発の時に川俣も危ないかも知れないと言われて、猪苗代に避難。県外に知り合いもないので、ホテルのロビーに泊まらせてもらうことになったが、ホールボディカウンターを受けないと泊めてくれないと言われて翌日受けに行った。やがてお金が

きてくるので、伯母の借りていた別荘に泊めてもらったが、それぞれが不満とかがたまって喧嘩になってしまうので、またホテルに移って 1 ヶ月ぐらい泊まらせてもらった。

◆地震の翌日、浪江の親戚が移ってきて合計 18 人になった。しばらく一緒にいたけど、3 家族意見が合わなくて、言い合いになっちゃったりして、原発も危ない状態になったので、飯舘に。そこも原発で危ないので、仙台の伯母の家に行ったがそこも水が出ない状態。そこで母が危ない状態になったので、埼玉県に移り転校した。なかなか受け入れてもらえなくて、友達ができなかった。鹿島の学校が再開したのもどれてよかった。

**不安を抱えた生徒たち…困っていること、
どういう支援が？**

★震災のニュースを見ると、今も夢に出てきてこわい。

★原発がこわい。津波で、叔父・伯母が死んだので、こわい

★家族と過ごせて、元の生活に戻れているが、夢を見る。やはり不安がある。

★夜中にふと思い出して、あの時ああすればよかったのに、と思う。

★原発事故があって、食べ物とか、母も色々勉強している。水道水は飯舘のほうから来ている水だから、料理や飲料水はペットボトルの水を買って使っている。

★除染されていない校庭を使用しているのが心配。<注>4月10日から校庭の除染が始まった。

★支援物資に差がある。ペットも飼えないのは悲しい。

放射能のこと、避難所で教えてもらった

Mさんの発言が印象に残った。

「放射能のことについては、鹿島の避難所で教えてもらいました。友人とそういう話をよくするようになりましたが、こわくなります。放射能のことだけでなく、いろんな情報がとびかうので、ウソの情報には流されないように、と言いたいです。」

相馬東高校では、大震災の年の 5 月 P T A 総

会で、広島大学の神谷研二氏の講演会「放射能の影響について」を実施した。生徒会でも、学校敷地内の放射線量を測定し、「生徒会だより」で発表している。

原発についての複雑な思い…

半数の生徒があったほうがよい（B班）

★無いと不便なら、あった方がよい。

★安全が確認されたら再稼働してもよい。確実に安全ならよい。

★原発の性能が悪いわけでない。取り扱う側の問題。あってもよい。

★無い方がよい。何が起こるか分からない。

★無くしてほしい。電気より命。まだ帰れない人がいる。完全に安全だといえない。

学んだこと、群馬県のみなさんに伝えてほしいこと

☆忘れちゃいけない。他の県の人にも理解してほしい。

☆全国民が地震災害などに備えてほしい。まだ他人事だと思っているようだけど、今回の地震で大きなものが失われた。そのことを理解しあえたらと思う。

☆「福島県だから」「被災者だから」と差別しないでほしい。転校先で、きれいな筆箱を持っていたら「全然被災者に見えないじゃん」と言われて傷ついた。

☆避難先で冷たくされたことがあったが、原発に頼ってきたから仕方ないかなと思った。冷たくする人もいたが、いい人もいっぱいいた。人のやさしさに触れられた。

☆感謝する心を忘れないでほしい。今回の地震で、人とかかわりあいを学んだ。きれいな人とも力を合わせる。不満ためて爆発するよりも、言い合ったほうが大きくなる。

今後の進路—地元へ貢献したい人が多数

☆看護師になって地元へ貢献したい。

☆進学先は県外だが、将来は地元に戻り幼稚園の先生になりたい。

☆デザイン関係の専門学校に。震災にあった人達のために何かをしたい。

☆自営業を継ぎたかったが、取引先が警戒区域のためできなくなり、県外に就職する。など。



相馬に生きる

3年生になる生徒達は、相馬に生き相馬のために貢献したいという人が多く、このような若者達によって地域が守られていくのだと頼もしく思いました。しかし校庭は、まだ除染されず、校内に設置された線量計は0・267（群馬の我が家の庭は0・05）でした。懇談会を担当された小松先生は、私（針谷順子）の実家がある浪江町幾世橋地区の方で、今は相馬市に避難されています。また私と同

じ双葉高校の出身でした。思いがけない出会い。けれども、心から喜ぶことはできません。原発事故が会わせてたものでしたから。

福島第一原発の汚染水漏れが止まりません。第一原発港湾内のアイナメから51万ベクレル測定。原発事故は収束していません。危うい状況に曝されて相馬の若者達は生きているのです。

（針谷順子）

浦尻の干拓地から浪江町へ・・・三浦さん（農民連）に案内されて

以前、宮本常一著『日本の村々海をひらいた人々』という本を読みました。人々の、暮らしを良くしたいという強い願い。そのために続けられてきた様々な工夫や努力。そしてたゆみなく営まれる日々の尊い積み重ねが日本の里や山、海辺の懐しい故郷の風景になっているということがよく伝わってくる内容の本でした。

3月29日、私達は福島県南相馬市の農民連の三浦広志さんに、小高区や浪江等の農業用地の様子を案内して戴きました。広々とした浦尻の干拓地は津波による海水をすっかりかぶり、放射能汚染のために、かたづけられないままの壊れた家々や車が、田や畑のあちこちに点在し、見渡す限り黒々と広がる荒涼とした土地にかわりはてていました。

「あそこがうちの田んぼ」「これが私の自慢のトラクター」と三浦さんは指さして教えてくれました。そして「いつかはここでまた農業を続けたい」と熱をこめて語ります。

百年以上かけて親から子へと繋げて築きあげてきた生活も耕作地も、千年に一度の大地震で崩壊してしまう日本の厳しい自然です。そしてその厳しい自然と闘ってきた先人の努

力、闘いながらも自然を敬愛する先人の智恵ということを考えさせられました。

今回、福島の人々は、原発事故という自然災害以上の人為的な被害をこうむっているわけですが、農民連の三浦さんの前向きな気持ちや明るい言動に、こちらが励まされました。これからも福島からの情報に関心を持ち続けようと改めて思いました。（白石ひろ美）

取材を終えて・・・答えの出せない疑問符だけが増えていく

多くの尊い命を飲み込んだとは思えない穏やかな福島の海だった。

しかし災害の傷跡を目の当りにして、放射線量の数値と向き合いながら生きるとはどういうことなのか。目に見えない恐怖から逃れられない暮らしの中に自分がいたなら一体何ができるだろうか。答えの出せない疑問符だけが増えていく。そして福島を離れた私にはいつもと変わらぬ日常があった。

地元の先生方は出口のない現実を前に日々

のベストを模索されているようだった。守らなければならない家族がいて生徒がいる。傷ついた生徒の心に寄り添って語りかけたい言葉にも葛藤があって・・・疲れきった心はどこで癒されるのだろうか。

せめて何日だけでもゆっくりと休んでいただきたい。切実にそう思った。

群馬の温泉につかって心置きなく語り、気兼ねなく笑えるそんな日をぜひ実現したいと思った。（朴順子）

つながることの大切さを再確認することができました

今回の福島での取材はまさに「百聞は一見にしかず」。どれだけ文章を書き連ねても、静まりかえった町の空気、延々とつづく荒れ果てた田畑に横たわる車や耕耘機、崩れ落ちた家の無念の叫びは伝えきれません。

川俣高校で応対していただいた鈴木裕子先生から後日、メールをいただきました。

「福島では事故が過去のこととして忘れ去られていくことを心配しています。私でさえ、日々の忙しさの中で何もなかったという錯覚にしばしば陥ります。考えること、向き合うことに疲れてしまい、もういいやなんて思ってしまうこともあります。そんな時、遠くからいらっしゃった方とお話しするだけで、また頑張ろうという気持ちを持つことができます。」

私は、この言葉から「つながる」ということの大切さを改めて思い知りました。今回の県外取材は、「何か出来ることはないか、教職員や生徒の現状はどうなっているのだろうか」という思いから企画されました。何か支

援できることはないだろうかと、行く前は思っていました。一番大切なことは、被災された方たちと私たちがつながりをしっかり持つことだと思いました。そのことが鈴木先生の言う「お互いが頑張る気持ちになる」ことだと思えます。

ぐんま教育文化フォーラムは、これからも震災の復興、原発の問題について学習会等を行い、決して風化させないという強い意識を持って望みたいと思います。

取材にご協力いただいた福島県立高教組のみなさん、川俣高校、相馬東高校のみなさん、ありがとうございました。みなさんのことは忘れません

（須田章七郎）





のどかな阿武隈川堤防だ



故郷は目の前に



希望牧場入口付近は数値が高い

福島訪問時放射線量測定記録（取材班手随携行の線量計による：一部は常設線量計による）

那須高原SA	0.273~0.416	
福島市内	0.24	
福島県教育会館内	0.078	
同 駐車場	0.68	
同付近阿武隈川堤防上	1.56	
同付近側溝の中	4.79	
川俣高校	0.13	
相馬農業高校飯館分校	4.408	
同公設表示計	3.817	
松川浦原釜浜辺	0.057	
松川浦 丘の上の墓地	0.265	
亀屋旅館食堂	0.07	
南相馬市小高区鈴木安蔵宅	0.24	
同浦尻地区津波被災農地	0.24	
同 道路上	0.65	
同 山中道路	4.7	
希望の牧場入口牧草上	6.75	
同 牛頭骨	0.602	
同 地上1m	4.68	
相馬東高校敷地内表示	0.267	
同 校舎内	0.059	
伊達市115号線（走行中）	4.3	
同 霊山地区（走行中）	1.19	
福島市内（走行中）	0.5~0.273	
福島松川PA	0.179	
乗用車タイヤ前輪／後輪	2.14／0.172	
靴	0.172	
二本松	0.483~0.651	
本宮付近	0.237~0.153	
郡山付近	0.291~0.327	
阿武隈	1.47	
那須塩原	0.268	

1目盛りは0.1 μ Sv/毎時 少数点以下第1位未満は切り捨ててあります。↑ 2.28 μ Svは年間被曝量20 μ Svに相当します。
太字は警戒区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域内

